

優秀修士論文概要

ウィリアム・モリス『シグルド』研究

——語られてこなかったものたちへの眼差し——

金子 麻詩歩

William Morris (1834-96) の長編物語詩 *The Story of Sigurd the Volsung and the Fall of the Niblungs* (1876、以下『シグルド』) は、古アイスランド語の散文英雄物語『ヴォルスンガ・サガ』の翻案作品である。モリスは青年期からアイスランドに傾倒し、翻訳や翻案によって英国の中世北欧受容に大きな功績を残した。本論では、デザイン分野の功績に比べ、現在では忘れられたように思われるモリスの言語芸術の中でも、彼自身が最高傑作と位置づけた翻案詩に光を当て、英雄物語の再造形によって生まれた原典との差異に着目した。

第一章では『シグルド』の美を考察した。モリスにとって美とは、“the epical”と“the ornamental”の二要素が調和することのみ生まれる。モリスは『シグルド』で、散文で残された中世北欧の英雄物語 (“the epical”) を語るのに最も適した形式 (“the ornamental”) として、長編物語詩を採用した。サガでは簡潔な文体の散文が美とされ、モリスはそれを認めながらも、なぜ『シグルド』において美を成立させる器は韻文でなければならなかったのか。

モリスの詩作態度は、イングランドのゲルマン性を強調したり、国民国家的な叙事詩の成立を目指したりした彼の同時代人とは一線を画す。というのもモリスは社会主義の文脈において、詩は小説と異なり、本質が変化することはなく、人類の普遍性を描き出す形式として社会形態を問わず有用であることを指摘しているからだ。その具体的な理由の一つは、詩は朗読によって音声として聞き手に受容されるからだろう。散文と異なり、人類の普遍的な詩の受容の仕方は語る行為と聞く行為であり、朗読によって詩は個人の域をこえ、共同体的になる。よって、モリスにとって韻文の採用は、19世紀イングランドのナショナリズムに帰依するためではなく、時代や国家を超越した英語詩受容者のための物語の創作を目指した結果だと言える。

さらに朗読を通じて韻文は身体性を獲得し、モリスの造形芸術と結びつく。実際、モリスは常に手仕事の傍で朗読しながら詩作した。手仕事と言語が矛盾なく繋がりが得たのは、モリスにとってどちらも手作業だからだ。本来手応えのない言葉に身体性を与えることは、文学と造形を密接不可分とし、手作業によって美を創作しようとしたモリスにしか成しえない。それ故、『シグルド』の加筆部分には、機織りや建築など民衆の手作業とその産物が詳細に描写される。物語の本筋に関係なく、脱線にも見えるこれらの加筆によって、モリスは英雄物語『ヴォルスンガ・サガ』の行間に隠された、理想の芸術の創造者である民衆の姿を取り戻しただけでなく、『シグルド』の形式と内容に調和をもたらしたのだ。

本論第二、三章では物語世界に視点を移した。中世文学は文体の簡潔さと、物事の因果関係や登場人物の動機の欠如を特徴とするが、モリスは中世北欧文学の中で繰り返し仄めかされる価値観に具体的な言葉を与え、独自の解釈によって大幅な加筆をした。本論では『シグルド』で登場人物の行動を規定し、物語世界の中心に据えられた二つの価値観を、〈語られるべき物語を持つこと〉と〈宿命に対する勇気〉

と定義した。

〈語られるべき物語を持つこと〉とは共同体のための勇気ある“deed”により“fame”を得て、後世まで残る“tale”になることを目指す価値観だ。登場人物の中で、「物語」を喪失し、その奪還に人生を費やす唯一の存在である小人レギンに注目すると、この価値観の意味が理解できる。今までの一般的な解釈では、レギンは全てを持ち合わせた理想の英雄シグルドの対立項に過ぎないとされてきた。だが21世紀読者としては、英雄になり損ねた失敗者にこそ魅力が見出せる。第二章ではモリスの加筆に着目し、レギンの価値転換を行った。

原典サガにおけるレギンの存在意義は英雄シグルドの養育と、シグルドが宝を獲得するきっかけ作りに留まり、物語からの退場も呆気ない。一方『シグルド』のレギンは多芸多才な職人、理想の詩人として再造形された。共同体と深く関わり、役立つ様々な知識を人々に授けたレギンは、モリスの理想である、民衆が作り上げる共同体にとって必要不可欠な創造者だ。それだけでなく、モリスはレギンがその名誉を神々に奪われたという設定を付与した。レギンは生きる意味を奪われ、ゆえに世界と神々と対立せざるを得ない存在となり、名誉（＝「物語」）の奪還はレギンの行動理由の一つとなる。人々から畏怖される職人だったレギンは、「物語」を奪われて全てを失った老人へ零落し、「物語」の奪還を試みたために育て子シグルドによって、神々の敵として殺される。モリスが再造形したレギン像は、英雄の資格を持ち合わせた者ではなく、虚しく奮闘した弱者を中心に『シグルド』を読み替えることを可能にしている。

『シグルド』における正当な英雄はあくまでもシグルドだが、レギンは紛れもなく共同体にとっての知られざる英雄だ。モリスが執拗なほどレギンについて加筆をしたのは、原典で“things unsaid, unheard”とされた彼の功績を正当に語り直したかったからだ。加えて、レギンが体現するのは、矮小な存在でありながら自我を持つ一個人として、巨大な敵に立ち向かうことが人々を英雄にするという、現代の英雄像だ。21世紀読者として、今までシグルドとの対比によって高貴さの欠如のみが指摘されてきたレギンに新しい英雄像を見出すことは、『シグルド』という作品全体を読み替えることの意義を表しているのだ。

『シグルド』を貫くもう一つの価値観は〈宿命に対する勇気〉だ。登場人物たちは、神々が人間に与える“fate”が必ず死をもたらすと知りながら、抗おうとしない。その理由は、モリスが原典よりも強調した中世北欧の終末観、ラグナロクだ。ラグナロクが設定された世界において、戦に赴く男性たちにとっての「宿命」は、神々との繋がりを得る手段で、死後の救済を約束する。一方で女性たちは男性に付随する存在でしか物語に登場できず、死後の約束もなく、常に「宿命」によってもたらされる理不尽な悲劇の犠牲者だ。結果、男女で「宿命」に対する態度が大きく異なる。男性の行動規範は〈宿命を受け入れる勇気〉なのに対して、女性は〈宿命の中でも己を持ち続ける勇気〉だ。つまり『シグルド』における男性の態度は、彼らが所属する社会体制と信仰によって制約を受けるが、社会の枠組みから外された女性は自分の心や意志という普遍的な精神の働きに行動の根拠を見出す。その結果、女性たちが自らの意志で選んだ道筋は、「物語」を持たないとされてきた人々を背負うことにつながり、最後は男性中心的な物語の枠組みそのものを打ち壊す力へ昇華される。第三章では「宿命」に囚われながらも、復讐という手段によってそれを超えようともがく三人の女性、シグニー、ブリュンヒルド、グズルンを取り上げ、原典からの変更点に焦点を当てた。

まずシグニーは、家族制度と「宿命」に縛られている。彼女は自らの意思で一族の復讐を果たすが、

原典とは異なり、因果応報ではなく男性中心的な社会規範のせいで死んでゆく。そしてモリスはシグニーの描写に、彼女のような生き方しかできなかった数多の女性を仄めかした。

一方、ヴァルキュリヤのブリュンヒルドはあくまで個人として描かれる。モリスは特に彼女の孤独を強調し、常に共同体と同調する男性英雄シグルドと対比させた。彼女の内面が無価値であるかのように、誰も彼女の心に同調せず、たとえ彼女が共同体のために働いたとしても、その対価である「物語」や英雄性は、彼女が女性であるが故に与えられない。最終的に自らを救済するための手段として復讐を選ぶブリュンヒルドは、レギンのように現代でこそ価値の見出せる英雄だと言える。

最後にモリスはグズルンに数多の復讐の連鎖を断ち切らせ、『シグルド』という物語を終わらせる役目を与えた。彼女は復讐ののち、延々と続けられた「宿命」の連鎖を憎んで自殺する。モリスはグズルンの死を非常に印象的に描いたが、彼女の死は『ヴォルスンガ・サガ』からの採用ではない。本論では、『シグルド』において偉業や名誉、そして「物語」がいかに重要かを述べてきたが、それら全てを憎んで死を選んだ彼女の最期の言動は、神々と男性が作った世界、ひいては中世北欧文学から『シグルド』が受け継いだ物語世界の枠組みそのものを壊そうとしたのだと解釈できる。「宿命」に対抗して自らを頼った結果の彼女の死は、21世紀読者の前には建設的な破壊として提示される。

以上のことをまとめると、モリスは原典サガの世界観に具体的な言葉を与え、時空を超えた、言語による空想的な共同体のための物語詩として『シグルド』を仕立てた。そして現在において、彼の加筆に注目することで、英雄物語という枠の中で「物語」を得られなかった人々の奮闘にこそ“Great story of the North”を動かす、新しい英雄のあり方を見出せる。シグルド的な英雄像が行き詰まり、非現実的になった今、モリスがひっそりと仕込んでおいた英雄が輝きを増すのだ。

参考文献

- Mackail, J. W. *The Life of William Morris*. Longmans, Green & Co., 1922.
- Morris, William. *The Ideal Book: Essays and Lectures on the Arts of the Book*. Edited by William S. Peterson. University of California Press, 1982.
- . *The Collected Works of William Morris*. Edited by May Morris and Peter Faulkner, 24 vols. Routage/Thoemmes Press, 1992.
- , and E. B. Bax. *Socialism: Its Growth & Outcome*. S. Sonnenschein, 1893.
- 川端康雄『ウィリアム・モリスの遺したもの デザイン・社会主義・手仕事・文学』岩波書店、2016年。

優秀修士論文概要

1930年代におけるウィリアム・カーロス・ウィリアムズ詩論

後 藤 ゆ り

1930年代末に書かれた短詩“The Halfworld”は、痩せ衰えた一人の青年が街灯の下でズボンの裾をはためかせる姿を描いている。星空の下で夜の影に包まれた青年は疲労と孤独の中にある。しかし青年を見つめる語り手はその姿に「美しさ(“beauty”)」を見出している。なぜ詩人は絶望的な状況下にある彼の姿を美として捉えることができるのか。その美しさとは一体何か。本論は世界恐慌によって人種や階級の間の溝が深まった1930年代に焦点を当て、詩人ウィリアムズの眼差しの在り方について考察する。貧富の格差が激化した30年代という社会的逆境の時代において、詩の創作にスランプを感じていたウィリアムズの眼差しは、詩人の精神内部ではなく外部の世界へと積極的に向けられていった。その結果として作品に姿を現す他者の存在は主に「女性」「労働者」「都市」の三つの軸に分けられる。思うように言葉が出てこない歯痒さを抱えながらも、詩人は人々の声にならない声を掬おうと試みる。そうして綴られた朴訥とも評され得る言葉には、実際にはウィリアムズという詩人の繊細さが表れている。他者について語るということは時に相手に対する独善的な偏見ともなり得る。しかし詩の言葉をひとつひとつ辿ってゆけば、自己と他者との間に越えられない一線が存在する事実を、ウィリアムズが強く自覚していたことが明らかとなる。

第一章では、男性詩人ウィリアムズが内包するエロスを芸術の原動力として肯定的に捉えた上で、詩人の性的な眼差しについて考察する。ウィリアムズにとって女性という他者は、生きた詩の言葉を導き出す強烈なエネルギーを秘めていた。多くの場合、作品に登場する女性にはモデルと思しき特定の人物は見当たらず、彼女らは緩やかな輪郭線を纏って様々に変化しながら常に輝きを放ち続ける。もちろん、男性詩人が性的な文脈において女性を描くことは、一歩間違えれば女性への侵害ともなり得るため慎重に考えられねばならない。だがウィリアムズの詩に描出される女性たちの姿は単に性的な欲望だけでは片づけられないものを含み持つ。詩人が日常に垣間見た女性の無防備な姿、間隙と言ってもいいあり様は、時代の一側面を浮き彫りにしてしまっているのだ。そうした特徴の背景にあるものとして、他者である異性との間の相剋する意識を詩人自身が充分自覚していた点が重要である。異性との間に立ちはだかる暗黙の壁の存在を認め、互いに独立した他者同士だからこそ傍に寄り添うことのできる隣人としての立ち位置を詩人は尊重しているのだ。産科・小児科医として医療現場で女性たちの苦難を目の当たりにしていたウィリアムズは、彼女たちの心が容易に説明できるものではないことを知っていた。そこで詩人は越えられない一線をあえて守る。そうすることで詩人の心は彼女たちの心に隣接して存在しているのである。

第二章では、ニューヨーク郊外を拠点とする医師であったウィリアムズの患者の多くが貧しい労働者であったことを踏まえ、労働者階級に対する詩人の姿勢に注目する。ウィリアムズは自身が属する白人中産階級よりも、むしろ労働者階級の姿にこそ人間が生きていく上で本質的に重要なものがあることを

感知していた。時に愛情を込めた軽やかな筆致で患者とのやり取りを表現するが、ウィリアムズが直面する現実はいつも微笑ましいものではない。労働者階級の何気ない生活風景に隠された鮮やかなストーリーを描き出す詩人の言葉は、生と死が常に表裏一体となって日常に存在している現実を浮き彫りにするのだ。そこで詩人が捉えているものは、人々の生活を取り囲む茫漠とした時代の猛威の中で、たとえ無力だとしても今を懸命に生きる名もなき人々の生命の熱量と威厳である。

さらに、人種や階級間の溝が深まる30年代において、ウィリアムズは社会的な障壁を越えて互いに他者である者同士が同じ地平に立つ具体的な方法を見出している。それは私たち人間が身体の奥底で普遍的に共有している身体感覚だ。詩の中に抽出された市井の人々の身体感覚は、恐慌下の労働者階級という言葉から想像され得る貧窮状態とはおよそ対照的な、鮮やかな生命の感覚、そして逆境を生きぬく人々に共有される鋭い痛みを伝えている。左翼的な気運を受けてウィリアムズは資本家による労働者階級の搾取を批判してはいるが、自身の創作活動と政治的なコミニズム運動とを関連させることには否定的だった。ウィリアムズの詩が核心に迫ろうとする労働者階級の姿は、究極的には政治的な符帳によっては語り得ないものなのだ。それでも詩人は、30年代という時代の文脈の中で特別な意味を持つ労働者階級の生身の声に迫り、時に流血を伴う暴力、さらには目に見えない暴力をも書き留める。それはウィリアムズ自身もまた資本主義に捕らえられた者の一人であるがゆえに可能になったのだ。

第三章では、都市という人工的な舞台の中で蝕まれてゆく生命を顕在化させるウィリアムズの視線をたどる。労働者階級の搾取に付随するものとして、資本主義の光と影を象徴する都市という存在が孕む異様さもまた、この時期のウィリアムズの詩人としての意識を喚起するのだ。ニューヨーク郊外に拠点を構えるウィリアムズにとって、アメリカ社会の繁栄を象徴する都市空間に隠された欺瞞は、肌身を通して感じられるものだった。欲望に覆われた都市という虚像の実態として詩人が明らかにするものは、権力による略奪行為と暴力だ。さらに詩人は金銭的な富というものが偽装する架空の価値に社会的病理の根源を洞察している。その上でウィリアムズは、都市の影に追いやられた存在として、工場の低賃金労働に従事させられた黒人労働者たちの姿に焦点を当てる。そこには、自立した生活を営むために個人の願望を捨てて工場の生産ラインに立たねばならなかった労働者たちの朦朧とした感覚のリアリティが捉えられており、都市が内包する悲しみに焦点を当てることで、逆説的に詩人はそこに失われてはならない生命の輝きが存在することを訴えている。

またウィリアムズは時として断片的な事物そのものの姿を簡潔な描写で詩に書き留める。例えば風に吹かれて翻りながら通りを舞う紙切れや、裏庭に放置されている割れた瓶の破片などだ。それらは一見すると何の変哲もない光景に思えるが、暗に時代の様相を反映するものとして意図的に選択されている。ふと目に映った時代の破片とも言える都市生活の残骸にある事物の様相に詩人が捉えていたものは、都会の雑踏で踏み潰され転がっていく普通の人々の在りようだ。視覚的要素を主軸として最小限の言葉で描き出された都市の断片的イメージは、緊張感とともに漠然とした危うさをも孕んでいるのだが、その点から言ってもウィリアムズにとって都市は身近でありながらも決して自分のものにはなり得ない存在、広義の他者として考えられるだろう。“The Flower”において詩人は都市の摩天楼に色も形もない花の姿を重ねて映し出し、ハドソン川に浮かぶ摩天楼の繁栄を外側から眺める。同時に、郊外の周縁に存在する深刻な貧困の声を聞いていたウィリアムズは、両極の世界の狭間に響く不協和音に揺さぶられながら肯定的なものを探し求めた。そこで地に足のついた生命の息吹を取り戻すべく提示されるのが「花」というアイコンだった。想像力によって生み出された一枚一枚の花びらは、詩人の思いをのせて解放さ

れていくかのように、距離や時間の制限を越えて様々な場所に舞い降りる。花びらは最後に詩人を自らの原点へと立ち返らせ、この前代未聞の光景を前にして信じるべきものを今一度問う。同時にそれらの花びらは、目に見えない壁に隔てられて分離した社会に身を置く人々の共感を願う詩人の思いをのせて舞うのである。

本論の全ての章を貫くウィリアムズの眼差しが捉えているものは、愛憎を抱えながら30年代という逆境を懸命に生きごく普通の人々の姿だ。時に異質を嫌い同化を謳い、他者を排斥せずにはいられない矛盾が蔓延る世界で、人々は社会的な規範によって差別化され目に見えない境界線に隔てられていた。しかし、社会における親近感と嫌悪感の平行線上を達観する境地を目指すかのように、ウィリアムズはあえて人々を隔てる境界線の真上に立とうとする。結果として詩人の眼差しが捉えた人々の姿は、たとえ権力によって喧伝される繁栄からは零れ落ちた存在であったとしても、決して地球からも人類からも零れ落ちることのできない輝きを持つ生命だということが読者に伝わってくる。そうした生命を掬い上げることでウィリアムズが究極的に求めていたものは、「対話」だった。社会が人種や階級や貧富の格差という距離を要請するのであれば、詩人はそれをすり抜ける言葉の「近さ」を仮構することによって対話を試みる。その場合相手の存在は彼から遠い方が望ましい。他者を同化するのではなく、互いの間に決して越えられない「距離」を感じとることによって初めて真の対話が可能となるからだ。30年代のウィリアムズが詩を通して一貫して試みた対話は、それを読む現代の読者への協力の要請であるように受けとれる。その要請とは、詩人が見つめていた世界の片隅と出会うこと、つまりそこにある人々の姿と出会うことなのだ。

優秀修士論文概要

Gulliver's Travels における法批判とアイルランド支配

長 谷 陸

本論文は、*Gulliver's Travels* を「法と文学」という観点から読み解いたものである。「法と文学」とは、法と文学の間の密接な関係性を研究する学際的な研究分野だ。歴史的には法と文学の間には密接な関係が存在したが、学問の専門分化によって、そのような関係性が見失われてしまった。このような現状に異議を唱え、法律学と人文学のつながりを回復させようとする試みが、「法と文学」という研究分野だ。

本論文では、*Gulliver's Travels* を「法と文学」の観点から読むことによって、この作品が読者に理想的な法制度とは何か、現実とは何かを思考させる哲学的な作品であることを明らかにしようと試みた。ただし、*Gulliver's Travels* は Swift の考えを究極の答えとして提示しているのではなく、通念を攪乱し読者に思考させようとしている点が通常の哲学書とは異なる。

1章では、*Gulliver's Travels* において、航海する国ごとに法律が否定されていくという展開に注目した。Gulliver が最初に訪れた小人の国 Lilliput は、法治国家にもかかわらず、Gulliver は小人による法律の恣意的な運用に苦しめられる。それに対して、次に訪れた巨人の国である Brobdingnag では、法律は簡潔であり、小人の国とは対照的に賢明な国王が適切に国家を運営している。最後に訪れる人間より賢い馬 Houyhnhm の国には、法律が存在しない。彼らは理性的に話し合いで物事を進めるので、法律が必要ない。このような展開を、十八世紀における自由主義と共和主義との対立として読解した。自由主義とは、個人の権利を重視する考え方であり、法学的な発想で世界を解釈する。それに対して、共和主義とは、公共的な事柄を重視する考え方であり、法律よりも法を運用する人間の徳を重視する。

自由主義と共和主義との対立を軸に分析すると、*Gulliver's Travels* では航海するごとに、自由主義は否定され、共和主義が強調されている。しかし本論文では、Swift は必ずしも単純に自由主義を否定して、共和主義を称賛したのではないと考える。自由主義と共和主義の長所も短所も示すことで読者に法制度について考えさせようとしているのだ。

小人の国では、Gulliver は法に苦しめられるが、小人たちの視点に立ってみれば、物理的な力で上回る Gulliver を法律によって縛り、国を守ることに成功したといえる。つまり法律があれば力の弱い人間でも強い人間と対等に渡り合うことができるのだ。これは自由主義の長所である。

反対に巨人の国では、Gulliver は法律の保護もないために、自分の身は自分で守るしかないが、巨人たちに力で負けているために、見せ物になることに抵抗することができない。共和主義では徳のない人間は低く扱われてしまう。さらに、馬の国では、人間以外の存在が、人間よりも道徳的に卓越していた場合、その判断に従うべきかどうかという難しい問題提起がなされている。これは、共和主義の論理を突き詰めた場合の難点を示している。Swift は決して単純に共和主義を肯定しているのではなく、読者の思考を刺激しようとしている。

2章では、当時のイングランドにおいて法が科学のモデルだったという歴史的な文脈を踏まえて、*Gulliver's Travels* が、事実と虚構を攪乱する作品となっていることを示す。科学技術社会論の議論によれば、何が真理とみなされるかは、社会的な状況によって異なる。当時のイングランドにおいては法律が真理と虚偽を区別する際のモデルだった。当時の法律では信頼できる目撃者の存在が、事実であるかどうかの基準であり、それを自然科学者たちも採用していた。*Gulliver's Travels* は、そのような事実を重視するイングランドの文化を攪乱させることを意図している。

2章では、Gulliver が航海から帰還するごとに、航海の証拠を示さなくなり、目撃にも否定的になっていく様子に注目する。これは1章で法律が否定されていくのと並行している。しかし、1章で示したのが、法律が単純に否定されているわけではないように、目撃や科学も単純に否定されているわけではない。2章ではSwiftの目撃や科学に対する、肯定と否定の入り交じった複雑な感情を明らかにする。

小人の国ではGulliverは、小人たちを見下ろす存在である。しかし、Gulliverは眼鏡を持っているにも関わらず、眼鏡で小人たちを観察しない。航海の始めから目撃に対して消極的な態度がうかがえる。小人の国から脱出して海を漂流するGulliverを拾ったイングランドの船長は、はじめはGulliverの話信じないが、Gulliverが小人の国から持ち帰った証拠を見ると、彼の話信じる。これは当時の目撃者を重視する考えに対するSwiftの皮肉である。

続く巨人の国では、Gulliverは見下ろす存在から一転して、見下ろされる存在になる。Gulliverは巨人たちの肌の細かい凹凸が見えるせいで、巨人たちが醜く見えてしまうことに気付く。よく見ることでかえって物事が醜く見えてしまう。さらに、巨人の国から巨大な鷲にさらわれて脱出したGulliverは自分を拾ったイングランド船の船員に、巨大な鷲を見たか尋ねる。船員は、鷲を見たが、普通の大きさだったと答える。Gulliverは、巨大な鷲が普通の大きさに見えたのは、その鷲が普通よりも高く飛んでいたからだと考える。同じ鷲を見たはずなのに証言が食い違うことがあり得ると示されている。

馬の国では、HouyhnhnmたちはGulliverの眼が顔の前についていて、一度に見渡せる範囲が少ないことを指摘する。これは人間の視覚が不完全であるということだ。欠点を指摘され最終的に馬の国を追いやされたGulliverは、海で漂流していたところを船に救われる。しかし、Gulliverは航海の証拠を示さないため読者は彼の話を実際かどうか疑わざるを得ない。しかし、船長はGulliverの話に耳を傾ける。今までの船はイングランドの船だったが、この船はポルトガルの船なのだ。この船長はイングランド人のように証拠を示さなくても話を聞いてくれるという意味で素晴らしい人物なのか、それとも証拠がない話を信じる愚か者なのか、確定しがたい。Swiftはあえて解釈の確定は不可能にし、読者を混乱させようとしている。

Part3には、科学に対する両義的な態度が表れている。Part3に登場する科学者はみな浮世離れしており、その発明品も現実にはあり得ないようなものばかりである。Swiftにとって、科学は抽象的で現実離れしていて、それが政治に悪影響を及ぼすこともあるものだ。しかし同時に、現実を離れることによって、新しい変化を人間にもたらすものでもある。*Gulliver's Travels* という作品それ自体が現実から離れることによって、読者に影響を与える作品になっているのだ。

3章では、Swiftが*Gulliver's Travels* という一義的な解釈ができない複雑な作品を書いた理由を、当時のイングランドとアイルランドの関係と、Swiftの伝記的事実から考察する。Swiftが生きた時代には、アイルランドはイングランドの実質的な植民地であり、理不尽な法的不平等が存在した。アングロ・アイリッシュであるSwiftは、その法的不平等から恩恵を受けると同時に抑圧も受けており、その

中間的な立場が *Gulliver's Travels* を複雑な作品にしたのだ。

3章で取り上げる法律は宗教的な差別である Test Act と、アイルランドの立法権を制限する Poynings' Law の二つだ。前者は、アイルランド聖公会の聖職者のみが公職に就くことを許されるという法律であり、Swift はアイルランド聖公会の聖職者としてこの法律を支持していた。後者により引き起こされたアイルランドとイングランドの摩擦について Swift は度々政治的なパンフレットで非難していた。また、Swift は父と伯父が法律家であり、彼自身が法律家になる道もあり得たこと、Swift は結局聖職者になったものの、彼は敬虔な信徒とは言えず、むしろ教会を制度として捉えていたということも重要だ。Swift は法律家を攻撃するが、彼自身が法律家的な聖職者であり、彼の法律家批判は自己批判としても捉えられる。

Gulliver's Travels において、アイルランドとイングランドの軋轢が表れているのは、Part4だ。Part4において、Houyhnhm に支配されている Yahoo もまた法を持っていない。Houyhnhm は理性的だからこそ法が必要ないのだが、Yahoo は自分たちで法を作る理性がないせいで Houyhnhms たちに支配されているのだ。この Yahoo の姿は立法権を制限されているアイルランド人たちの姿だと考えることができる。Swift は共和主義的な発想から、力のないものが支配されることもやむを得ないと考えていた。*Gulliver's Travels* は法が必要なくなるほどの徳が持てないにしても、せめて自ら法を作ることができる程度には徳を持て、というアイルランド人への激励だったとも解釈できる。

この論文では、「法と文学」の観点から、*Gulliver's Travels* が様々な解釈に開かれた作品であることを示した。Swift はあえて一義的に解釈できない作品を書くことによって、理想的な法制度とは何か、そして現実とは何かなど、知的にも政治的にも困難な問題を読者に思考させようとしたのだ。